

城下町松山の都市プラン

窪田 重治

Shigeharu Kubota



写真2 松山城(本丸)の天守閣
(注)寛永16(1639)年、松平定行は5層6階の天守閣を3層4階に改修した。天明4(1789)年元旦、落雷で焼失。文政3(1820)年再建着工、嘉永5(1852)年落成した。



写真3 城下町の景観をとどめる内濠 (注)西堀と本町通り。堀の幅36.36m・南北540m。

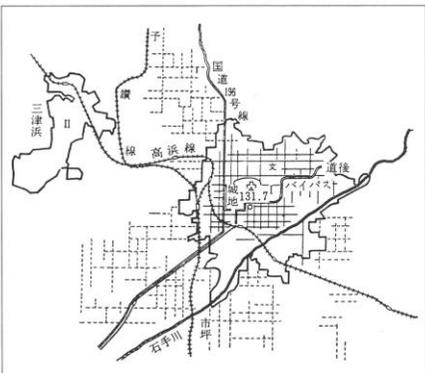
今に古い天守閣と周濠をとどめる松山には、城下町の景観が保存されている(前頁写真1)。旧市街地の町割も、ほとんど旧城下町当時のま、といつてよい。しかもこれが、古代の松山平野における条里地割を踏襲し、城下町の町割の基準線に継承されている。ともかく、城下町の形態を過去のものから切り離しては、考えることができないのである(第一図)。

正木(松前)城主・加藤嘉明は、慶長五(一六〇〇)年関ヶ原の戦功により、六万石から伊予半国二十万石に増封されると、二十万石の貫禄にふさわしい城郭と城下町の移転を画策した。

慶長七(一六〇二)年幕府の許可を得て、足立重信を普請奉行に任じ、居城を松山に移すことになった。勝山の丘上(一三二・七メ

ートル)を、城郭構築のため土地をならし、農村地帯を城下町にするため石手川の改修治水を施した。慶長七年一月十五日から、家中地割を定め、六月朔日「古町三ヶ町」の地割をした。「本丸」・「二ノ丸」・「三ノ丸」の位置を定めて城郭の構築に着手した。工事は旧物破壊の突貫強行手段で行われ、旧城の松前城、道後の湯築、廃城の築石で北郭・東郭(現東雲高校)を築いた。道後の集落を城北に移して道後町・今市町、城西に松前城下の商人や住民を移して松前町、城南に唐人町(現三番町一丁二丁目)を形成した。

翌八(一六〇三)年十月には、家臣団・中間・小者にいたる奉公人や町人総てを帯同して新城下町に移った。それ以来、城を松山城と呼び、城下町を松山という。



第1図 松山市D.I.Dと市街地及び周辺の条里地割(点線)
出典 藤岡謙二郎 1968 日本の都市 その特質と地域的諸問題
大明堂 52頁による。

核を城郭・天守閣において、封建領主の権威の象徴とし、人工と天險を巧みに利用した平山城を築き、城下を睥睨する形をとった(写真二)。

城郭は本丸・二ノ丸・三ノ丸の三重方式をと

り、三ノ丸は濠で囲った(写真三)。

濠や土手は、軍事的防御線のみならず、町に締をつけること、つまりアーバンスプロール現象の拡大防止をねらった。念斎堀・薬研堀・かわらけ堀・砂土手を築いて石手川堤防とともに外防御線としたが、農村と城下町の画定線の意味もあった。

内濠線内の三ノ丸(堀之内)は、領主の有力側近に代表される特定家臣の武家屋敷七十一軒と、普請所・会所・勘定所・永蔵など藩領統治の中核機関が集中する城下町

城下町建設は、寛永四(一六二七)年嘉明の会津転封まで、二十六年間の継続工事であったから、豪商の物資調達能力と財力を抜きにしては城郭工事は不可能であった。「古町」の町割を急いだのも、有力御用商人相図屋宗都・府中屋念斎の協力を得るためであった。念斎堀を穿ちこれを御築山まで延長して外堀にしようとした計画は、「古町三ヶ町」の区画も念斎の企てであった。

藩領の主都松山城下町は、その

